HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | シャルル・フーリエと共同性 |
| Author(s) | 大塚, 昇三 |
| Citation | 經濟學研究, 35(3), 136-147 |
| Issue Date | 1986-01 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/31712 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 35(3)_P136-147.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 35-3
北海道大学 1986. 1

# シャルル・フーリエと共同性

大塚昇三

## はじめに

1832年にアベル・トランソンは，シャルル・フーリエ（1772-1837）の構想した未来社会像を「絶対的自由による絶対的秩序」と評している[1]。

さらに1905年に，フーリエの学説とそのフランス社会主義への影響について詳細な研究を著わしたユベール・ブールジャンはこう書いている。「フーリエは，ルソーとはまったく逆に，無政府主義的国家・経済的不平等・道徳的自由・男女の平等な教育を唱導する理論家なのである」と[2]。そして今日，リアザナフスキーは，自由が秩序へと通じるというフーリエの判断における楽観を指摘しながらも，かれを「人間の完全な自由と自己表現とをその旗印としたあらゆる人びとの聖なる恩人」として評価している[3]。こうしてフーリエの自由を希求する叫び声は，いまなお人びとの心をとらえてはなさない。

では，フーリエのいう自由とは具体的に何を意味していたのか。それを一義的に規定するのは困難である。しかし，アイザイア・バーリンの提示した自由概念の3つの分類にしたがえば，この三様の意味が，フーリエのいう自由のなかに多かれ少なかれ含まれていることがわかる。すなわち第1に，諸個人が何らかの権力を選ぶことができる自由，第2に，諸個人が権力の侵害から護られねばならないという自由，そして第3に，諸個人が権力によって人格的に承認されるという自由，この3つである[4]。ちなみに，この第3の自由概念は，人びとの孤立化が進む現代においてわれわれが追求する共同性という価値にとっての不可欠の要素でもある。

ところでリアザナフスキーはこうも書いている。フーリエの構想した未来社会の目的は，「人びとの全情念が充分に発揮されるように人間関係を組織すること」であると[5]。つまりリアザナフスキーは，バーリンの提示した第3の自由概念をも踏まえてフーリエの自由をとらえているわけである。しかしフーリエの思想の全体的把握を目ざしたかれの研究では，この人びとが選択した権力による人格的承認という意味の自由が充分に強調されていないように思われる。

そこで本稿では，人びと相互の人格的承認を不可欠の要素とする共同性の価値視点からいま一度フーリエの思想を検討し，その価値が実現

1）Henri Louvancour, *De Henri de Saint Simon à Charles Fourier. Étude sur le socialisme romantique français de 1830.* Chartres, 1913, p. 72. サン・シモン主義派内部で権力と自由という問題が俎上に載せられはじめたとき，サン・シモン主義者であったトランソンは，ルシュヴァリエとともにフーリエ主義へと転向していったのである。cf. Hubert Bourgin, *Fourier. Contribution à l'étude du socialisme français*, Paris, 1905, pp. 427-436.

2）*Ibid.*, p. 66.

3）Nicholas V. Riasanovsky, *The teaching of Charles Fourier*, University of California press, 1969, p. 241.

4）Isaiah Berlin, *Two concepts of liberty*, Oxford, 1958, (repr. in *Four essays on liberty*), 生松敬三訳『二つの自由概念』，『自由論』，みすず書房，1971年，所収，295～390頁。

5）Riasanovsky, N., *op. cit.*, p. 66.

される具体的あり方を明らかにしてみたい[6]。

## I　生産の集団化と家族制度

シャルル・フーリエが幸福な未来社会の構想を書きつらねた動機については，かれ自身の説明から明らかである。貧困問題がその動機である。そこで問題とされた貧困は，かれの「文明にあっては貧困が豊かさそのものから生じる」という言明[7]からもわかるように，それは豊かさの中の貧困であった。つまり，産業の飛躍的進歩によって豊かな富が生みだされるようになったにもかかわらず，それが少数の人びとに独占される結果生じる貧困であった。したがってかれのこの問題への取り組みは，富の生産もさることながら，富の分配の問題を中心になされることになる。

その場合フーリエの念頭にあった分配の公正さとは，各人が所有する3つの生産要素，すなわち労働・資本・才能にたいし，年々の生産物を6：4：2，または5：4：3の比率で分配することであった[8]。そしてこの分配の観点からかれは貧困問題，つまり富の独占と集中を批判していたのである。

それにしてもすぐれて経済学的な意味をもった概念を，厳密な定義なしに用いているフーリエの分配論は難解であり，その論理構造を明らかにするのは容易ではない。けれどもかれの貧困問題への取り組みを理解するためには必ずしもその疑似経済学的分配論を明らかにする必要はない。なぜならかれのこうした分配論は，それとは別の問題に置換されうるからである。その問題とは，資産の異なる人びとのあいだに，どうしたら愛情の絆を育むことができるのかという問題である。フーリエは感傷主義というそしりを警戒しながらも，金持と貧民[9]とが親子の情愛・兄弟愛・夫婦愛・家族愛といった愛情の絆でかたく結ばれるならば，富は，それぞれが満足のいくように分配されうると考えていたからである[10]。つまりかれは分配の不公正の原因を，階級間の愛情の絆の欠如に，さらに言えば「自分の利益のために他者を犠牲にする」諸階級のエゴイスムに見い出したのである[11]。したがってこの愛情の絆の形成という問題を明らかにすれば，少くともフーリエの分配論の基本構造は解明されうるものと思われる。

そこで以下，人びとの愛情の絆をどうしたら育むことができるのかという問題に焦点を合わせながら，フーリエの主張に耳をかたむけることにしよう。

書字狂とおぼしきフーリエの著作にはくり返

6）本稿でのフーリエの著作はすべて以下の全集版を使用した。*Oeuvres complètes de Charles Fourier*, édition anthropos, Paris, 1966-1968. 12 vol.

7）Fourier, *Le nouveau monde industriel et sociétaire ou invention du procédé d'industrie attrayante et naturelle distribuée en séries passionées*, Paris, 1829, (*Oeuvres complètes*, t, VI),〔以下この著作を N. M. と略記する。〕p. 35, 田中正人訳『産業的協同社会的新世界，つまり，情念系列のうちに配分された，魅力的自然的産業の方法の発見』，『オーウェン，サン・シモン，フーリエ』，中公世界の名著，第42巻，1975年，所収，481頁。なお，訳はかならずしもこれによっていない。以下，同様。

8）Fourier, *Théorie de l'unité universelle*, Paris, Libraire Sociétaire, 1841-43, (*Oeuvres complètes*. t. V),〔以下この著作を U. U. と略記し，この著作にかんするかぎり全集の巻数をその都度示していく。〕p. 502. しかしこの数字の根拠は不明である。なお，この著作は *Traité de l'association domestique-agricole*, Paris et Londre, 1822. を増補改訂したものである。

9）この金持，貧民という言葉が具体的にどういう人びとをさすのかは，必ずしも明確ではない。しかしかれのよく用いる金持・中産・貧民という3階級区分は，12の下位区分を含む7つの階級からなる「文明のカーストおよび下位カーストの階梯表」を簡易化したものと考えられる。cf. U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 388-390.

10）N. M., pp. 319-320.

11）Fourier, *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales. Prospectus et annonce de la découverte*, Leipzig〔Lyon〕, 1808, (*Oeuvres complètes*, t. I),〔以下この著作を Q. M. と略記する。〕p. 80, 巖谷國士訳『四運動の理論』，現代思潮社，1970年，上，142頁。なお，訳はかならずしもこれによっていない。以下，同様。

しが多く[12]，論理性にとぼしい。しかし，かれの生前の主要刊行著作の中で，冗長な『家庭的農業的組合概論』(『普遍統一の理論』) (1822) を要約した『産業的協同社会的新世界』(1829) はそれでも比較的よくまとまったものと言える。しかもその序文では，他の諸著作でもくり返し取りあげられる論題が簡潔にまとめられている。そこでまず，主としてこの序文[13]に依拠しつつ，かれの思い描いた人びとの幸福の実質的内容と，その実現のための条件とを抽出してみよう。

フーリエの考えていた幸福は次のように要約できる。つまり幸福とは，人びとが，階級・年令・性差の別なく，ともに力をあわせて働き，その果実を，ともに汗を流した仲間と楽しく享受することであると。そしてこのような幸福を実現する方策として，かれは，生産と消費の集団化の必要性を提示する[14]。

生産の集団化とは，生産を人びとが個別にではなく，集団で行う労働の組織形態を意味する。生産を集団化すれば，そこに分業・協業を導入することができ，豊かで多様な富が生み出される。さらにその集団化は，生産現場をして人びとの日々の出会い (la rencontre habituelle)[15] の場となし，その場で人びとの愛情の絆が育まれる。この人びとの出会いが愛情を育むという考え方と，その出会いの場としての生産現場への着目とは，後にみるとおりフーリエの思想における共同性を考察する上できわめて重要である。

他方，消費の集団化とは，起居をともにする人びとが一堂に会し，富を個別にではなく，集団で享受する生活の組織形態を意味する。消費を集団化すれば，生産物の流通が簡易化され，住居や所帯道具など多くの消費財が節約できる。しかも人びとは，相互に譲りあいの精神を発揮しながら，かれら自らが生産した豊かな富を享受する。だからそこでの消費生活は，物質的にも精神的にも豊かである。つまりこの豊かさは，生産活動によって生みだされた富と，その活動を介して育まれた愛情の絆とを基礎にして成り立つ。したがって生産の集団化こそは，幸福のための根本条件であると考えられている。

ところで文明社会における家族制度とは，生産と消費を家族単位で行うことによって成立している。生産は家族単位に細分され，生産用具は「所帯の数だけ」必要となる。そして耕地も同様に細分され，その生産性は低下する。そこでは分業・協業の導入がはばまれ，仲間とともに汗を流す喜びはない。つまり各家族が個別に労働する生産現場では，他の家族との愛情の絆を育む余地はない。しかも協業を欠くことから各家族の負担は増すばかりである。その結果人びとは，「つらい労働を忌み嫌う」ようになり，「労働の忌避」願望が育まれる[16]。それによって労働の生産性は一段と低下することになる。

生産とともに消費もまた家族単位に細分される。住居や所帯道具は所帯の数だけ必要となり，集団消費にくらべ，その不経済はいちじるしい。しかもそこでの消費生活には他の家族と譲りあう精神を発揮する場がない。そもそも，そのような精神などはじめからないのである。さらに消費が家族単位でなされるかぎり，主婦は家事に追われて家業に手を貸すことができない。そ

12) Cf. Riasanovsky, N., *op. cit.*, pp. *x-xi*.
13) N. M., pp. 1-46, 田中訳, 441～494頁。
14) この着想は，フーリエがそのテキストの中の随所で名前をあげている人びと，François de Neufchâteau, Cadet de Vaux, (de) Rumfort といった人びとによって既に提起されていた。cf. Bourgin, H., *Étude sur les sources de Fourier*, Paris, 1904. なおこの論文は Bourgin, *Fourier* (*op. cit.*) の巻末に収録されている。
15) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. III), p. 175.
16) Fourier, *La fausse industrie morcelée, répugnante, mensongère, et l'antidote, l'industrie naturelle, combinée, attrayante, véridique, donnant quadruple produit. Mosaïque des faux progrès des ridicules et cercles vicieux de la civilisation. Paralléle des deux mondes industriels, l'ordre morcelé, et l'ordre combiné*, Paris, 1835-36, (*Oeuvres complètes*, t. VIII), 〔以下この著作を F. I. と略記する。〕 pp. 369, 400.

れゆえ一家の主が，労働力にならない妻と幼い子供を扶養しなければならないことになる。

こうして文明社会における家族制度にもとづく生産と消費のもとでエゴイスムが一般化するようになる。つまり人びとは「妻や子供のために働くという口実のもとに，あらゆる略奪や詐欺が正当化されると思いこむ狭量なエゴイスト」になりさがってしまうのである[17]。そしてこうしたエゴイスムは文明社会全体に深く浸透するようになる。フーリエはこの状態を次のように描いている。「あらゆる産業者は大衆に反目しており，個人的利害のゆえに大衆にたいして悪意を懐いている。医者は同胞市民が重い熱病にかかることを願い，また検事は各家庭で大きな紛争がおこることを願う。建築家は町の¼を灰燼に帰す大火事を必要とし，ガラス屋は窓ガラスという窓ガラスを割る激しい雹を願う。洋服屋や靴屋は，商売上の利益をあげるためにわれわれが布地や靴を3倍使うように，人びとが色のさめやすい染めの布地や悪い皮の靴しか用いないことを願う」[18]。

## II　商業批判

既に見たように生産と消費が細分された状況では，経済単位である各家族を結合するなんらかの機構が必要となる。文明社会におけるその結合は商業機構によって行われる。しかしこの商業機構は，ほんとうに各家族を結合するのであろうか。

ブザンソンの服地商を営む富裕な商家に生まれたフーリエは，幼くして商人の欺瞞に気づきながらも，結局家督を継ぎ，みずから商人となる。しかしかれは，フランス革命の動乱で破産し，もはや商売を続けることができなくなり，一介の商店員に身を落とす。そこでかれは，商人がおりからの食糧不足に乗じて買い占めた穀物を結局倉庫で腐らせてしまったとき，それを海に捨てる作業を監督するはめに陥っている[19]。こうした商人の暴挙を実際に体験したフーリエは，商業機構の正当性を否定し，批判する。ではかれはこの商業機構をどう批判するのか。以下この問題について考察してみよう。

商業の主たる担い手が商人であることはいうまでもない。しかし実際には，富裕な製造業者もその余剰資本で商業を営んでおり，一般にはこの両者の機能は混同されがちである。だがフーリエは，商業機構を分析するうえで，まずこの両者の機能を明確に区別しておかねばならないと考えた。そしてかれはその区別を次のようにとらえている。「製造所長は商人のおこなう取引を容易に肩代わりすることができる。すなわちかれらは原料を直接買い求めて，製造した物産をまっすぐ目的地へ送るか，あるいは販売ないし配給のために代理人を派遣すればよいのだ。ところが商人の方は，どうもがいても製造業者にとってかわることはできないし，かれらがいなくては物を作り出すことができないのである」と。つまり富の生産ばかりではなくその流通という観点からみても製造業者は「重要」であり，商人は「無用」なのである[20]。そしてフーリエは，富を作り出す製造業の労働を，また言うまでもなく農業労働を「生産的労働」と規定し，商業活動を「不生産的労働」と規定する。

さて，この商人と製造業者の機能を混同している経済学者は，「自由競争の原理」にもとづいた商業機構こそが生産物の流通と節約とを実現すると思いこんでいる。したがってかれらの提唱する政策は，「商人のなすにまかせよ」，「商人にまったき自由を与えよ」というものであった。そしてこの政策を受け入れた政府は，みずから富を生産しない商人に，それゆえまた，本来生産物の「条件付受託者」であるべき商人に，

17) Fourier, *Publication des manuscrits*, vol. IV, Paris, 1857-58, (*Oeuvres complètes*, t. XI), p. 208.
18) N. M., pp. 33-34, 田中訳，479頁。
19) Cf. Riasanovsky, N., *op. cit.*, pp. 1-31.
20) Q. M., pp. 261-262, 巖谷訳，下，123～124頁。

「かれらの取引する商品の絶対的所有権」を含む「絶対的自由」を認める[21]。そしてここに，文明社会の商業制度が確立することになる。

では，この商業制度は，経済学者の言うように生産物の流通と節約とを実現するのであろうか。

フーリエの答えはこうである。すなわち，商業制度は社会にとって有害な商人の特性を合法化し，さらにそれを社会全体に波及させる。この有害な特性とは「寄生性」である。つまり，みずから富を生み出さずして他人の生み出した富に寄生するという特性である。この「寄生性」の社会全体への波及は，生産物の流通を混乱させるばかりではなく，生産物のいちじるしい浪費を招き，ひいては生産の減退をも具現してしまうことになると。以上のことをかれの論理にしたがって少し詳しく考察してみよう。

フーリエはまず，商業制度のもたらすゆゆしい効果をこう指摘する。すなわち，先に見た「絶対的自由」を認められた商人は，大衆に課税する「権限」を「公的権利としてではないが実質的に」獲得することになると。「ばか者は課税をするのは政府だけだと信じこまされている。しかし商業は議会の承認なしに，まったく違ったやり方で課税するのだ」と。商業制度の中で商人は，かれの所有する商品を倉庫にためておいてその価格をつり上げることも，またその商品を水増ししてそれを実質価値よりも高い価格で売ることも自由である。さらにかれらは膨大な量の商品を信用買いで手に入れてそれを隠匿し，破産宣言をすることも自由である。そしてこのような様々な手口によって商人は，生産者大衆・消費者大衆から富を略奪するわけである。しかも「これらすべての略奪は，商業の自由についてのすばらしい理論によって支持されている」。それゆえこの略奪は，「自由の名で美化された」罰にではなく「賞賛に値する盗み」なのである。それは政府による大衆への課税と変わるところがない。つまり商人の略奪とは「議会の承認なしに」なされる課税にほかならないというわけである[22]。

みずから富を生み出さない商人の収入が，こうした「課税」によって大衆から略奪された富から構成されていることは明らかであろう。つまりかれら商人は大衆によって養われているのである。言いかえれば商人は，文明社会において「寄生階級」を形成するわけである。しかもこの「寄生的かつ不生産的商人からなる階級」は，商業制度が確立して以来，社会全体を従属せしめるまでに成長した。フーリエはこう述べている。「地主，耕作者，製造業者，さらには政府といったあらゆる不可欠の階級は，商人という不必要な階級に牛耳られてしまっている」と[23]。

さて，既に見たように文明の家族制度によって生産が細分されているかぎり，「生産的労働」は嫌悪の対象となり，生産者たちはその「忌避」をたえず望んでいた。他方，商業制度の柱である「自由競争の原理」は，誰でも商人になることを許す。それゆえ誰でもつらい労働を放棄して，他人の富に寄生する寄生階級に仲間入りすることができる。その結果，誰もが商人となっていくようになる。

まず，農業経営に従事する領主層が商人となる。商人の手にする暴利は，「3％」と見積もられている農業の利益率を相対的に低下させる。そこで領主層はその領地を手放して動産にかえ，それを「政府による課税も，小作人との訴訟沙汰も免れて，なお4％の利益率が保証される」公債への投機に[24]，また生産物の買占めに流用する。つまりかれらは生産的な農業を放棄して寄生階級に仲間入りするわけである。

またその数の多い零細農民についても例外ではない。「一家の主たちは，農事を放擲して行商に憂身をやつしている。たとえ仔牛一匹しか売るものがなくとも，かれらは市場や集会所や

21) *Ibid.*, pp. 239-240, 同書，83～84頁。

22) F. I., pp. 307-321.

23) Q. M., p. 222, 巖谷訳，下，56頁。

24) F. I., pp. 423-424.

居酒屋をほっつき歩いて数日を無益にすごすだろう。この悪習が猖獗をきわめているのはとくに葡萄の産地である」[25]。つまりかれらも「生産的労働」を放棄し，寄生階級の仲間入りをするのである。

こうしていたるところで自由競争が商人の数を増化させている。その結果「節約の保証のために起用された商人は，必要人員の20倍に達している」。そしてこの「商人の過剰」は過当競争を生みだし，商人の略奪の手口は陰惨の度を強めていく。かれらはまじめに耕作する小規模な「生産者たちを強奪すべくいつも待ち伏せている」。豊作であればその生産物は売れず，生産者は商人から借金し，凶作のときも価格が高騰するまえに手早くその生産物が商人によって買い占められてしまう。つまり「生産者は，いかなる状況でも利益をあげることができず，いつも商人の犠牲となる」わけである。あげくに生産者はその土地を手ばなさざるをえなくなり，その糊口の資は断たれてしまう[26]。

このような没落農民，さらには自由競争に敗れ無一文になった失業者たちは「貧民救済所」へとなだれこむ。パリだけでも「援助金や施物を請うためのみじめな回状を書く不幸な人びと，12の貧民救済所に登録された85,000人の不幸な人びとがいる」[27]。しかしそこに登録された人びとも，結局はひとつの寄生階級を形成することになる。なぜならかれらを養う援助金は，主として大衆から巻きあげられた租税によって構成される国庫から支出されるからである。

では「貧民救済所」にも登録されず，国庫からの援助にありつけなかった無産者たちはどうなるのか。かれらは「盗賊」になる。つまりかれらも，非合法的にではあるが他人の富に寄生して生きていくのである。この略奪は暴動へ，内乱へ，そして革命へと展開する可能性も秘めている。それゆえそれを防止するための「警察費」も膨大なものとなる。その負担を背負うのはやはり，もう数少なくなってしまった生産者なのである[28]。そして合法・非合法をとわず自分たちが生み出した富に巣食う寄生階級にたいする生産者の憎悪は，いや増すことになる[29]。

こうして商業制度は，はからずも多くの生産者の「労働の忌避」願望を実現させ，生産現場から生産者大衆を駆逐してしまう。その結果生じている状況の中にフーリエは，ただ減少するばかりの富をめぐる万人の万人に対する戦いを見た。そこでは「人びとは国家の利益よりも自分個人の利益を優先させることに慣らされてしまい」，「誰もが公衆を欺くことを利益とみなす」ようになっていたのである[30]。

以上のことから，フーリエによれば現実の商業制度は，細分された経済単位を結合するどころか，そのアトム化を極限にまで押し進め，生産の集団化をさらに困難にする制度であったことがわかる。

## III　労働の組織

幸福の根本条件は生産の集団化であった。しかし文明社会においてそれを実現するのは容易ではない。家族制度は生産を細分化し，さらに商業制度は生産者大衆をその生産現場から追いやってしまった。それゆえ生産を集団化するためには，たんに生産者を集団に組織するのではなく，人びとを集団化した生産現場につれ戻さなくてはならない。それにはどうすればよいのか。

フーリエはこう考えた。もし集団での生産活動が快楽をもたらすものであれば[31]，かつての

25) Q. M., pp. 249-250, 巖谷訳，下，101頁。
26) F. I., pp. 331, 423.
27) *Ibid.*, p. 405.
28) *Ibid.*, p. 324. cf. U. U. (*Oeuvres complètes*, t. IV), pp. 173-174.
29) Cf. U. U., (*Oeuvres complètes*, t. III), p. 174.
30) N. M., p. 49, 田中訳，497頁。cf. F. I., p. 329.
31) フーリエの労働観を知るには次の箇所が参考になる。「労働は人間によって変えることのできない運命ではないと言明するのは，摂理を否定することになるであろう。また労働は人間の運命であり，かつそれは人間にとって幸福をもたらしは

生産者にかぎらず寄生階級もこぞって生産現場に戻ってくるのではないかと。つまりフーリエは，人間は本来「無為」よりは活動を欲するものだと前提し，人間は生産活動によっても快楽を得ることができると判断したわけである。

そこでフーリエは，快楽としての生産活動のあり方を規定すべく，人間の活動一般への欲求，いわば活動欲求の分析に着手する。そしてその欲求対象を3つに分類する。活動の多様性，活動の競争関係，活動の単純性がそれである。

まず活動の多様性について。人間は「カメレオン」的気質，つまりものごとに飽きやすい性向を有している。それゆえたとえ「活発な」活動であっても，それを長時間続けていると人間は「倦怠」を感じざるをえなくなる。また「いかなる楽しみも長時間続けば適度を越えたものとなり，諸器官を鈍らせ，快楽をそこなう」。したがって活動が快楽となるためには，この「移り気」を満足させる活動の多様性が必要である[32]。

第2に，活動の競争関係について。人間は「嫉妬と自尊のいちじるしい奴隷である」。それゆえ人間は，たとえ裕福であっても「隣人を粉砕しようとする偏執」にとりつかれており，「対抗者を粉砕する」ことから快楽を得るのである[33]。したがって活動が快楽となるためには，この偏執をある程度充足するような活動の競争関係が必要である。

第3に，活動の単純性について。人間は「啓発されることよりも眩惑されることの方を望むものだ」[34]。つまり人間は，道理よりもむしろ「盲目的激情」を好む。そして人間を「熱狂の中へ没入させる」ような活動とは，複雑なものではなく単純なものである。したがって活動が快楽となるためには，この熱狂を誘う活動の単純性が必要である。

このようにフーリエは，人間の活動にかんする3種類の欲求対象を規定した[35]。そしてかれは，この分析にもとづいて，これらの欲求対象を具備する生産活動，つまり快楽としての労働の具体的あり方を構想する。まずかれは，人びとが様々な仕事に，個別にではなく集団で従事することを前提しつつ，それら3つの欲求対象をそれぞれ備えた3つの労働の組織形態を提示する。

第1に，「短期就労」の形態。これは人びとが従事する各仕事の継続時間を最高2時間とし，各人の好みに応じた様々な仕事の兼職を可能にする。

第2に，「緊密性」の形態。これは競争関係の生じやすい類似した仕事を並置する。

第3に，「部分就労」の形態。これは各仕事をできるかぎり細分化し，単純化する[36]。

これら3つの労働の組織形態にもとづいた生産活動の具体的有様は，フーリエのアソシアシオンの構想の中に見い出される。そのアソシアシオンとは，それぞれ異なった資産を株式で所有する[37]300から400家族，約1600人[38]の人びと

しないと言明することも神を非難することになるであろう」(F. I., p. 171.)。つまりフーリエは，人間は永久に労働するよう運命づけられており，かつ労働によって幸福になれると考えているわけである。

32) N. M., pp. 74-76, 田中訳，510～512頁。cf. *ibid.*, p. 250.

33) Q. M., p. 251, 巌谷訳，下，102頁。

34) *Ibid.*, pp. 200-201, 同書，23頁。

35) 以上の分析についてはフーリエの情念論を参照。cf. N. M., pp. 66-78, 田中訳，500～515頁。またフーリエは，これらの欲求も含めた人間の欲求一般を充足する権利こそ，自由を構成する人間の自然権だと論じている。cf. U. U., (*Oevres complètes*, t. III), pp. 163-173. しかもその自然権は，フーリエの想定した自然状態，さらにはかれの循環史観的宇宙生成説とも密接に関連している。これらの問題を考察するにあたっては，ミルチャ・エリアーデの「祖型と反復」という考え方が参考になると思われる。その検討は今後の課題である。cf. Mircea Eliade, *La mythe de l'éternel retour ; archétypes et répétition*, Libraire Gallimard, NRF, Paris, 1949, 堀一郎訳『永遠回帰の神話―祖型と反復―』，未来社，1963年。

36) F. I., pp. 358-370.

37) *Ibid.*, p. 67. また，この株式の階級別の収益率，および保有数については，*ibid.*, p. 86.

38) この数字は，フーリエ独自の人間の性格分類にも

が，直径約3000トワズの土地の基盤の上に，主として農業を営む自給自足的共同体である。その成員が従事する生産部門は，そこでの生活に必要な生産物の種類に応じて150ほどの職種に分割される。そしてそこではそのおのおのの職種に応じた労働集団が組織される。この集団は「産業集団系列」と呼ばれる。さらにこの「系列」は，7つの班に編成される30ほどの，最低7人からなる集団によって構成される。この7つの班の区分は，ここで生産される生産物を基準として行なわれる。ここに類似した生産物を生産する労働集団が並置され，その生産物の完成度をきそう競争関係が生み出される。一つの班を構成する諸集団は，その生産物の生産のための仕事をできるかぎり細分し，分業を導入する。そしてこの分業にもとづいて形成されるアソシアシオンの成員は2時間を限度に，様々な「系列」，様々な集団を各自の好みに応じて縦横無尽に駆け回るわけである[39]。このように組織された労働は人びとの活動欲求を満たし，ひとつの快楽となる。こうして金持も貧民も，老いも若きも，男も女も成員すべてが快楽を求めて労働に励むことになる。つまりそこには「無為」にときを過す人間は存在しなくなるわけである[40]。

ところで生産の集団化の目的は2つあった。豊かで多様な富の生産と，人びとのあいだの愛情の絆の形成がそれである。この2つの目的は，労働の快楽化を至上命令としたアソシアシオンの労働の組織によって達せられるであろうか。

まず富の生産について。アソシアシオンを構成する150ほどの「産業集団系列」は，生活に必要な富の生産のために協業を導入する。さらに「系列」の各班では分業が導入される。そして人びとは好みに応じて様々な仕事を次々にこなしていく。この仕事の転換は肉体をバランスよく運動させ，その結果人びとの活力は増進される[41]。また各人の好みに応じた仕事への従事は，その仕事への熱狂を誘う。しかも類似した仕事に従事する諸集団はその生産物の完成度をきそう。この競争関係は労働の迅速さをも生み出す[42]。以上，アソシアシオンの労働の組織は生産性を高め，豊かで多様な富を生み出すことがわかる。

次に愛情の絆の形成について。アソシアシオンの労働の組織では，仕事の「自由な選択」が認められているので，その成員はみな，「自分が気に入って選択した仕事だけをする」。その結果かれらは「陽気で活発になる」。しかもかれらはその生産現場で，嗜好を同じくし，かつ階級・年令・性別を異にする人びとと日々出会うことができる。この生産現場での人びとの交流は仕事の楽しみを倍化させる。そして各成員は生産現場で様々な人と「出会うことを望むようになる」[43]。この生産現場での「日々の出会いによって」成員のあいだに友情が育まれ，強化されることになる。

この友情の絆は，異性間では「恋愛関係へと発展する」ものである[44]。そこでもし男女それぞれが複数の配偶者をもつことを認めるような

とづいて算定されたものである。cf. N. M. pp. 110-111, 340-344, 田中訳，559頁。しかしこれらの数字の根拠は不明である。

39) Q. M., Note A, pp. 292-306, 巖谷訳，下，171-194頁。

40) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. III), pp. 172-174.

41) N. M., p. 75, 田中訳，510～511頁。この点にかんしては，J. S. ミルの「分業の利益の分析」(『経済学原理』) の考察をひくまでもなく，フーリエの説明は納得しがたい。

42) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 399-400.

43) F. I., pp. 359, 369, 371. ここでこの日々の出会いにかんして言及しておくべき問題がある。それは，アソシアシオンの人員規模を規定するかれの人格論と，人びとの日々の出会いとの論理的関係である。つまり，まず人格論があってそして人びとの出会いが論じられるのか，それとも逆に，人びとの出会いが問題とされたがゆえに人格論が展開されることになったのかという問題である。フーリエのテキストはこの前者の論理によって書かれているようである。しかしかれの思考経路は後者の論理にそうものであったと言えなくはない。しかしその論理がどちらであったとしても，かれが人びとの出会いに着目したという事実にかわりはない。

44) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), p. 395.

複婚制度が採用されれば，この恋愛関係は文明の単婚制度におけるそれとは逆に，人間関係の拡大に寄与するようになる[45]。

さらに各班における分業はその班を構成する諸集団の相互依存の意識を高め，この意識が動機となって班の中に「全体的な友情」が育まれることになる。しかもこの友情は，生産物の完成度をめぐる班同士の競争関係によって「団体精神」へと高められる。つまり各班の成員たちは，この「団体精神」によってかたく結ばれるわけである。またこの班の成員の中の経験豊かな老人は，班の仕事に対して「献身的な若者」に「父性愛」を懐くようになり，かれを自分の熟練を伝授する「産業後継者」あるいは「ふたりめの息子」と見なす。他方この若者は，老人からその経験を学びつつ，かれに対してたんなる友情を越えた「子としての愛」つまり思慕の念を懐くようになり，かれを「ふたりめの親父」と見なす。その結果この老人と若者との間に養子関係が取り結ばれるようになる[46]。こうしてアソシアシオンに養子制度が導入され，それは複婚制度と相まって成員どうしの姻戚関係をいちじるしく拡大する。

このような関係は，アソシアシオンの成員が様々な班，様々な「系列」を飛び回ることによってさらに拡大されていく。以上の結果，アソシアシオンにおける階級・年令・性別・家族といった区別のなかから，家族が消滅する。つまり約1600人からなるアソシアシオンがひとつの家族となり，その成員すべてが家族愛によって結びつくことになる。アソシアシオンの労働の組織は，確かに人びとのあいだの愛情の絆を育み，強化，拡大することがわかる。

したがって労働の快楽化を至上命令としたアソシアシオンの労働の組織は，生産の集団化の2つの目的を達成することは明らかである。

## IV　生産の集団化と共同性

さて，既に見たように生産を細分する文明の家族制度は，たんに土地と労働の生産性を低下させるばかりではなく，エゴイスムをも普及させるものであった。また商業制度は，商人の「寄生性」という社会にとって有害な特性を国民全体に普及させ，生産者大衆を生産現場から駆逐し，ただ減少する一方の富をめぐって万人の万人に対する戦いを具現するものであった。それゆえこれらの制度が生産の集団化の2つの大きな障害であることは明らかであろう。

そこで，この家族制度と商業制度とを賞揚するモラリストと経済学者とがフーリエの批判の槍玉に挙げられることになる。文明の家族制度は不和と倦怠のあらゆる原因を内包し，またそれを具現していくものであるにもかかわらず，モラリストはこの制度を「神の英知」として賞揚している。こうして文明の家族制度が絶対的なものと見なされるようになった結果，「家族による生産の細分化は人間の自然，つまり人間によって変えることのできない運命であると説く偏見」が生じることになる[47]。この偏見に毒された経済学者は，「われわれを豊かにするために，このもっとも小さく，かつもっとも費用のかかる家族」を所与の経済単位とし，略奪行為を野放しにする商人の無政府的競争を賞揚しているのである[48]。

またフーリエは，貧民への援助や施しを呼びかける博愛主義者も批判する。なぜならこの援助は「貧民を怠惰に慣らさせ」，かれらを「無為にとどめておく」からである。しかもその援助の増大は，不生産的な「貧民の数をふやす」ばかりである。それゆえ「かれら貧民に与えるべきものは，そのような援助ではなく，なにもしないで過ごすための時間をも仕事にあてたくなるような，そのような楽しい仕事なのであ

45) Q. M., pp. 125-126, 巖谷訳，上，210～211頁。
46) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 445-450.
47) N. M., p. 8. 田中訳，449頁。
48) *Ibid.*, pp. 469-470.

る」[49]。

さらにフーリエの生前，とみに世論に受け入れられるようになった産業主義者にもかれの批判の矢は向けられる。フーリエは産業主義をこうとらえている。すなわち「これは，つり合いのとれた分配にかんするなんらの方途もなしに，つまり生産者もしくは賃金労働者が，増大した富の分け前を受けることができるようにする方策をなんら講じることもなく，ただやみくもに富の増大を目ざす偏執である。だから産業主義が支配する地域に，この種の進歩とは無縁な地方と同じくらい，またおそらくそこ以上に乞食がみちあふれているのが見られるのである」と[50]。要するにこの産業主義を信奉する人びとは，富の「公正な分配」をうまく行わせるための技術，すなわち労働を快楽化し，生産現場での出会いを通じて人びとのあいだに「愛情の絆を育む技術」を知らないのである[51]。以上のモラリスト，経済学者，博愛主義者，産業主義者への批判から，フーリエが生産の集団化とその成果である愛情の絆とをいかに重視していたかは明らかであろう。

では産業主義者への批判の焦点にもなっている分配問題は，フーリエの重視した愛情の絆によってどう解決されるのだろうか。つまり，生産現場で育まれた人びとの愛情の絆はどのようにして「公正な分配」を実現するのだろうか。

既に見たように，アソシアシオンの労働の組織における仕事の競争関係は各班の「団体精神」を育む。その結果各班では成員相互の奉仕の交換がなされ，そこに助け合いの精神が普及することになる。そこで自分の所有する資本からの収入，つまりアソシアシオンの発行する「株式の膨大な配当収入に充分満足している」金持の成員は，その収入の一部を資本収入の少ない仕事仲間の貧民に譲渡する。さらにこの金持の成員は，「自分の好きな仕事を献身的に行う仲間たちと楽しみながら行った労働にたいする報酬を受けとろうとはしない」。こうした報酬の辞退は，かれらの発揮する才能への分配分についても同様になされる。かれらはこのようにその「労働と才能への分配分を放棄し」，そしてそれも仕事仲間の貧民に譲渡する。かたや貧民は，「自分にこの譲渡を受けとる資格がないと思えば，それを金持に返すことを望む」。こうして各人の所有する資本・労働・才能への分配は，階級を越えた愛情の絆にもとづいて，各人が満足のいくようになされることになる[52]。

この譲渡を可能にする階級を越えた助け合いの精神は，金持の老人の，貧民の若者に対する「父性愛」と，後者の前者に対する思慕の念へと高められるものであった。ここからこの両者が養子関係を取り結ぶことが可能となる。この関係は財産相続のあり方を刷新する。なぜなら金持の老人は，かれの「遺産の一部を相続する資格」をその養子に認めるからである。つまりこの養子関係によって，血縁を持たない貧民にも金持の遺産を相続する機会が開かれるわけである。しかもこの貧民の相続機会は，かれが金持と取り結ぶ養子関係の数だけ，すなわちかれの参加する労働集団の数と同じだけである。フーリエはこのような相続のあり方を，文明社会のそれを「集中相続」と呼ぶのに対し，「分散相続」と呼んでいる。このような富の分配は，生産現場で育まれる恋愛といった愛情の絆にもとづいても同様に行われる[53]。以上のようにして人びとの愛情の絆は「公正な分配」を実現するのである。

さて，このようになされる富の分配は，生産の増大の問題にかんしても興味深い意義を有しているように思われる。最後にこの分配と生産とのかかわりの問題について触れておこう。

フーリエは分配問題に取り組むにあたって，ただ友情，団体精神，父性愛，恋愛といった感

49) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. III), p. 172.
50) N. M., p. 28. 田中訳，472頁。
51) F. I., p. 367.
52) N. M., pp. 317-321. cf. F. I., p. 86.
53) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 445-460, 468.

傷的な愛情の絆にのみ着目したわけではなかった。かれはより世俗的な感情である「貪欲」，つまりエゴイスムという観点からもこの分配問題を論じている。このエゴイスムから「公正な分配」を正当化する論理はこうである。すなわち，金持から譲渡を受けた貧民は，その「金持への献身の度を高め，その金持とともに行う仕事に一層熱心となり，それだけますます生産物が豊かになる」。この結果金持の収入・資産も増大する[54]。つまり金持から貧民への資産・収入の譲渡を基盤にして実現される「公正な分配」は，金持の成員の利害関心から見ても実現さるべきものなのであった。このことからフーリエの分配問題への取り組みは，たんに分配の不公正の是正ばかりではなく，生産性の向上，すなわち生産の増大の問題をもその射程に有するものであったと言えるであろう[55]。

だが上記のような利害計算の問題は，フーリエの主旨からすればさして重要なものではなかったと思われる。かれはこう述べている。人間の愛情の絆という「これほど微妙な論題を研究する際に，そのようなものは幻想であるといった，嫌疑をすべて退けたかったので，私は，論証項目にわれわれの社会関係のなかでもっともいやしいとされている部門，すなわち金銭的利害をとりあげたのである」と[56]。フーリエはエゴイスムに支配された文明人の啓蒙にあたってそのような利害計算の例をあげたのであって，かれの本意はむしろ人びとを博愛的行為へと導くような愛情の絆を育むことだったのである。

ともあれこの絆はどうしたら育むことができるのか。それは既に見たとおりである。労働が快楽となるように，また生産現場が人びとの出会いの場となるように生産を集団化すればよいのである。それにしてもフーリエの提示したこの方策の目的は実際に実現するものであろうか。人びとが出会えば愛情が育まれると仮定すれば，確かにその方策は有効であろう。しかし嗜好・利害を同じくする男女が出会っても，必ずしも恋が芽生えるとはかぎらない。なるほど愛情の絆のあるところには出会いがあるとは言えるだろう。だがその逆は必ずしも真ではない。それにもかかわらずフーリエは，人びとが生産現場で日々出会いさえすれば，愛情の絆が育まれると考えているようである。したがってかれの判断が楽観にすぎることは否めない[57]。

だがしかし，たとえ出会いによって愛が芽生えなくとも，またそれによって富の「公正な分配」が実現されなくとも，その出会いによって「人びとはお互いに思いやりを持ち，尊敬を懐く」ようになるであろう[58]。つまりそこでは「さげすまれた」人間，見捨てられた人間はいなくなる筈である。事実，「さげすまれた階級が存在するかぎり，アソシアシオンの機構は阻害されてしまう」と考えたフーリエは，アソシアシオンの成員として認められなければならない基本的要件についてこう書いている。すなわち，病人や不具者も含めてアソシアシオンの成員はみな「自由な資格，つまりその成員相互が人格的に対等な関係を取り結ぶことができる（SOCIABLES）資格」を認められていなければならないと[59]。したがってそこには「文明におけ

54) F. I., p. 91.

55) さらにまた，消費が生産を規定するとも言えるように思われる。フーリエはアソシアシオンの経済基盤を農業にもとめている。なぜなら農産物こそが，人間のもっとも強い欲求，すなわち美食の欲求を満たすからである。それゆえ人びとが農業に従事すれば，その飽くことなき美食の欲求を満たすべく，量・質ともにすぐれた生産物を生み出そうと懸命になる。つまり生産性が上昇するわけである。フーリエはこう述べている。すなわち，美食の欲求は「消費機構においてまず発動させなければならない動力因である。そしてそれは，この消費機構から生産機構へと通じるのである」(*ibid.*, p. 43.) と。cf. N. M., pp. 253-264. したがって消費が生産を規定すると言えるわけである。

56) F. I., p. 83.

57) Cf. Frank E. Manuel, *The prophets of Paris*, Harvard univ. press, 1962, pp. 195-248.

58) N. M., p. 75, 田中訳，511頁。

59) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), p. 383. ちなみに，フーリエの未完草稿『愛の新世界』(*Le nouveau monde amoureux*, (*Oeuvres complètes*,

る専制的支配も，また屈辱的な隷従も」あってはならないのである[60]。要するにフーリエの提起した方策は，その本来の目的を実現するまでには到らなくとも，それによって，人びと相互の人格的承認，階級を越えたなんらかの相互理解を形成するわけである。この点を見のがしてはならない。

現代われわれが追求しているいくつかの価値のなかのひとつに共同性がある。そして人びと相互の人格的承認となんらかの相互理解とは，この共同性という価値のひとつの要素，しかも欠くべからざる要素なのである。本稿で明らかにしたフーリエの主張のなかには，こうした問題にたいする示唆が豊富に含まれているように思われる。

---

t. VII, 1967）この4冊の部厚いノートからなる1967年に初めて公刊された草稿は，1817年頃に書かれたものとされている。cf. Jonathan Beecher, Richard Bienvenu, *The utopian vision of Charles Fourier. Selected texts on work, love and passionate attraction,* London, 1972, p. 16.）において偏執的性格が分析されている。そこでは，「私は同性愛の女性が好きであり，彼女らを喜ばすためなら何でもしたい」(Fourier, *op. cit.*, p. 389.）というフーリエ自身の倒錯的嗜好も告白されている。しかもこのような稀有の偏執的性格は，アソシアシオンを組織するうえできわめて重要な機能を有しているとされている。このことは人格的相互承認という本稿の論題から見ても興味深い。しかしこの『愛の新世界』およびかれの草稿集の熟読玩味は，筆者の今後の課題である。

60) N. M., p. 249.